

# マダム花子と同胞たち

## 異郷における日本人の和・輪

根 岸 理 子

### 1

20世紀初頭、西洋の芸術界で名を馳せた日本女優マダム花子（1868-1945）。ロダンの彫刻として永遠性を与えられた人物であるが、同胞たる日本人は、彼女の活躍を必ずしも好意的にとらえていたわけではなかった。こうした西洋と日本における花子の評価の落差に関しては、比較文化的考察が既にいくつもなされているが<sup>(1)</sup>日本人の間における花子評価の違いに注目した研究は見受けられないようである。よって本稿においては、特に花子と日本人の関係について考察を試みたい。

花子は1902年5月に渡欧し、1921年12月に帰国している。この長い年月においては、当然、日本人とも多く交流している。1912年末、演劇視察のためにモスクワに滞在していた小山内薫と花子は会うことはなかったが、小山内はスタニスラフスキーから花子について聞かれたことを書き残している<sup>(2)</sup>。自己紹介も含めた手紙を添えて、自由劇場の記録などをスタニスラフスキーに贈ったところ、自邸での年越しパーティに招かれたのであった。尊敬してやまないスタニスラフスキーやモスクワ芸術座の関係者と過ごした夢のような時間について描写している中で、貞奴と花子について聞かれたことのみ、ある種の不快な経験のように語られる。ムウラトワというベテラン女優が貞奴のことを褒め、共演をしてみたいと小山内に話しているのを聞いたスタニスラフスキーは、この話題にひかれ会話に加わる。この時のことを小山内は以下のように記している。

スタニスラウスキ氏は二人の話を側で聴いていましたが、やがて「僕

はまだ Sada Yacco を見ないのだが、実際はどうなのだ。」と聞くのです。私は丁度ムウラトワ夫人の何処かへ立って行っていないのを幸に、“Sie ist kein Künstler! (彼女は芸術家ではありません)”と稍激越な調子で言いました。しかし、私はスタニスラウスキ氏に“Warum? (なぜ)”と聞かれて、もう一言も返事をする勇気が出なくなりました。私共にとってこの問題に“Warum?”はないのです。私はその瞬間に日本人たる私と露西亜人たるスタニスラウスキ氏との間に、非常に遠い隔たりのあるのを感じて、何とも言えぬ寂しい感じに打たれました。しかし、スタニスラウスキ氏に私のその時の心持が分かる筈はありません。氏は更に問を進めて Hanako の事を聞くのです。私はもういても立ってもいられません。私は日本中の恥を一人で背負って立ったような気がしました。私は真赤になりました。「そんな人の名は日本で聞いた事ありません。」私は冷汗をかきながら、やっとこれだけ言いました。しかし、スタニスラウスキ氏はまだ私を信用しないような様子なので、私はどうして好いか分からなくなりました<sup>(3)</sup>。

貞奴や花子について彼らの同胞の意見を聞きたいというスタニスラフスキーの願いは、このように拒絶されたのである。小林実は、スタニスラフスキーと小山内両者の思惑を検討し、彼らの邂逅は、互いが相手に求めていることが食い違っていることに気づきながら、その食い違いの意味を理解できない「すれ違い」であったとしている<sup>(4)</sup>。

しかし、小山内はなぜそのような実りのなかった会話をわざわざ紹介したのであろうか。武田清が「小山内薫は日本とロシアで演劇の異文化接触が同時に双方向で起こっていることを観察する絶好の機会をみすみす逃してしまったのであった」<sup>(5)</sup>と指摘しているように、小山内自身、その時自分が何か重要なチャンスを見逃したということを感じ取っていたのかもしれない。だが、それならば、記述の仕方もおのずと変わってくるだろう。

おそらく小山内は、それは大変でしたね、お気持ちお察しますという読み手の共感を予期し、共に嘆くために、この成り立たなかった会話を紹介し

たのである。小山内が理解できなかったのは、自分と同じくスタニスラフスキーも相手から——異文化から——学びたがっているというごく当たり前のことであったのだ。それができなかったスタニスラフスキーは、この頃、ちょうど巡業でモスクワを訪れた花子に実演を依頼している。花子はその依頼に応じて、モスクワ芸術座のスタジオで日本演劇の喜怒哀楽を披露し、喝采を浴びたのであった。このことを小山内が知ったとしても、果たして花子に対する評価が変わったかどうかは分からない。そして、これは、小山内個人のみの話ではないのである。彼が「私にとって」ではなく「私共にとって」この問題に“Warum?”はない、としていることには注意を払うべきであろう。この「私共」はイコール「日本人」ではなく、「日本の知識層の男性」という限定的なものなのである。

## 2

こうした、読み手の共感を当たり前のように予期して貞奴や花子について言及するパターンは、小説「花子」を書いた森鷗外にも見られる。鷗外は、日英博覧会（1910年開催）において日本の芝居を上演するか否かの議論が起こった際に、西洋での花子の人気に触れる形で、以下のような意見を述べている。

大いに真面目でやつて貰いたいね。西洋では貞奴を日本のえらい役者と思つて居るのだからね。貞奴より劣つた花子といふやうなものや、此の間、ミュンヘンで死んだ日本の女優が相応に歓迎されて居る。(…)又批評の書物で見ると、貞奴が非常に賞賛されるのみならず、花子でさへ表情が猛烈で宜いと言はれて居る。斯ういふ場合だから日本のすぐれた俳優が行けば屹度有望に違ひない<sup>(6)</sup>。

1888年にドイツ留学を終えている鷗外に、花子の舞台を見る機会にはなかったであろう。したがって、花子の演技力など分かる筈もないのだが、「貞奴より劣つた」という評価をくだしている（これは、その容姿が劣るというこ

となのかもしれないが。) いずれにしろ、これは、こうした女たちが褒められるのだから、日本の優れた俳優——男優——が行けば、もっとうまくいくに違いない、だから安心して行ってこいという「日本の男たち」に向けての激励なのである。貞奴や花子を褒める西洋人に距離を感じているのは小山内と同様であり、日本の女優たちが優れたアーティストとして認められている可能性には触れようとしない。鷗外にとっても「この問題になぜ」はなく、その一点において、日本の知識層は結束しているのである。

この激励文を書いた翌年、鷗外は、花子とロダンの邂逅を描いた「花子」(『三田文学』1910年7月)を発表する。ロダンが花子について言及した実際の言葉を取り入れたこの作品において、鷗外は少なくとも西洋人が花子の何を認めたのかについて探ろうとしている。「花子」には、スタニスラフスキー一郎で真っ赤になった小山内を彷彿させる人物が登場する。日本人留学生の医学士・久保田である。通訳として花子についてきた久保田は、ロダンに花子を紹介する際、一種の羞恥を覚え、日本の女としてロダンに紹介するには、もう少し立派な女が欲しかったと思う。しかし、「意外にも」ロダンは花子が気に入り、着物を脱いだ花子のスケッチを仕上げる。最後にロダンが久保田に花子の体の美について語り、「強さの美ですね」<sup>(7)</sup>というロダンの言葉で小説は結ばれる。このロダンの言葉に対する久保田の反応は描かれることはなく、ロダンの花子評価に納得するかどうかは読者自身にゆだねられるのである。

ロダンの反応を気にする久保田の姿は、小山内だけでなく、アーティストとしての花子の実力とその魅力に懐疑的な鷗外自身とも重なる。無論、当時の日本の知識層の男性たちの姿とも重なり合う。たとえば、実際の花子の容姿を知っていた志賀直哉は「花子」を読んだ感想を次のように述べている。

ロダンのライフの一頁を読むやうな意味でかなり面白かつた。其他色々な意味で面白かつた。何かの雑誌で「欧州の舞台に於ける最も小さい女優」と云ふ題で、セイの低い容貌の悪い日本の女が扇と日傘を持ち、高い一本歯の足駄を穿いておどつて居る写真を見たが、それが花子で其後

も度々見た。中には十数人の独逸人の崇拜者を後ろに並べて写した写真などもあつた。芸は兎も角からだにいゝ所が有らうなどゝは一寸考へられない女である。読むて行く内にロダンがどういふかゝ心配だつたが結局大変讃められた。ワケを聞けば尤と思ふやうな讃め方である。かういふ意味からも面白く読むだ<sup>(8)</sup>。

志賀も久保田と思いを一つにして、「からだにいゝ所が有らうなどゝは一寸考へられない」花子に対してロダンがくだす評価を恐れ、良い部分を見つけてもらったことに、とりあえずホッと胸を撫でおろしているのである。志賀自身「芸は兎も角」とことわっているように、ロダンが花子に興味を持ったのはその「芸」にひかれてのことと思われるのに、アーティストとしての花子の実力はついに謎のままである。平川祐弘は「花子」の面白さは、西洋にふれることによって日本を振り返るという屈折した「見返りの心理」にあるのではないかと分析しているが<sup>(9)</sup>、西洋にふれて振り返った——西洋の見方で見ようと試みた——までが鷗外の限界で、やはりその評価の隔たりは埋めることはできなかったのではないか。鷗外も含めた当時の日本の知識層にとって、西洋に堂々と紹介できるのは真正の歌舞伎だけで、それに先んじて国際舞台で認められるなど、あつてはならないことなのであつた。花子の舞台の様子を伝える当時の新聞記事なども、当然その言説をなぞる形で以下のように書かれている。

ハナコは年四十許り芸妓上りか何かで美人でも何でも無い鼻の低い、眼の細い、口の大きな、顔には蕎麦粕か何かの出来た、背の極めて低い女である（…）ハナコ始め他の女は振袖を着て花簪を挿いて花櫛を挿いて御殿女中に成つたりお姫様に成つたりして日本人が見ると冷汗を流すやうな妙な踊をやつていたが日本の女の踊といふので見物はヤンヤヤンヤと喝采をするといふ始末、全く日本演劇の爲めには不名誉な話である責ては吉右衛門か宗十郎かの踊を見せてやりたいと思ふ程であつた<sup>(10)</sup>

「芸者あがり」の花子をアーティストとして認めないということで連帯している彼らは、西洋の優れたアーティストたちに自分たちと同じ価値観を求めたのである。ロシアの演出家・劇作家ニコライ・エヴレイノフによる以下のような花子評価など、たとえ触れる機会があっても見ぬふりをしたかもしれない。

ぼくはきみの芸術に魅了されてしまった、やさしい魅力あふるる花子よ！ きみは美人でもなければ、もはや若くもないが、そんなことはくそくらえさ。舞台の上で美と若さを体現してみせるきみのなんと美しく、若々しいこと！ 小柄で、滑稽で、胸に迫る花子よ！ ぼくは呼びかけるつもりだ、わが老廃せる舞台の女優たちがこぞってきみに見惚れ、きみから学ぶようにと。なぜなら、きみは“小賢しき”作者やら高価な衣装やら細々した舞台装置をあてにするでもなく、かくも新鮮で、かくも真に舞台的で、かくも魅惑的に美しいおのれの芸のみを頼りとしているのだから<sup>(11)</sup>。

花子はいわゆる美人ではなかったかもしれないが、美を生み出すその芸によって評価されていたのである。

### 3

それでは、花子と同胞の関係はずっと良好とはいえなかったのかというと、そうではないようで、花子の回想録（聞き書き）「芸者で洋行し女優で帰る迄の廿年」<sup>(12)</sup> および「貴族と女優との握手」<sup>(13)</sup> には、彼女を助け支えてくれた日本人の名が感謝の念を込めて記されているのである。

花子が生活のため、コペンハーゲンでの小さな博覧会——日本人村——に芸者として参加すべく日本を発ったのは、1902年5月のことであった。一緒に渡欧したメンバーの肩書は、芸妓、芸人、撃剣師、絵師、彫刻師、手品師、相撲業、扇製造業、竹細工業、縫箔業、鶺鴒師などで<sup>(14)</sup>、3ヵ月ほどの契約期間を終えると、ベルギーのアントワープから帰国の途についたとい

う。しかし、花子は、日本の踊りを見せる一団を組織してヨーロッパ中を打って回ることを決意し、異国に残る道を選んだのであった。

この時、花子は、畑中という店主の経営する日本料理店の世話になりつつ、好機が訪れるのを待った。ある日、ドイツ人の興行師と奇術師の松旭斎天一座のマネージャーの山口が畑中の日本料理店を訪れる。畑中からの使いで呼ばれた花子にドイツ人興行師は、ロンドンの芸人を集めて結成した一座に女優として参加しないかと誘いの声をかけた。天一座の興行をする予定であったところ、一座の花形の花勝の病気のため、中止になったことから新たに計画されたものだという。その申し出を受けることにし、芸者であった花子は、女優としてデビューすることになったのである<sup>(15)</sup>。

そもそも、興行師と山口はなぜ最初に畑中のもとを訪れたのか。それは、当時の日本料理店が、同胞と知り合い、情報を交換する場所として機能していたからであろう。現在のように、欲しい情報がどこにいても瞬時にして得られる時代ではないのである。各国に存在した日本料理店は、日本人が確実に同胞と会え、交流できる貴重な場となっていた。興行師と山口が、まず畑中を訪れたのも、そういった理由によるだろう。畑中の料理店がなければ、花子が女優になるチャンスは得られなかったかもしれない。

1930年代にアントワープで畑中と知り合った羽生操によると、畑中のフルネームは「畑中岩吉」で、花子と共に渡欧したメンバーの1人であったようである。羽生が会った時、畑中は60代半ばで、家業を娘夫婦に譲って隠居同様に暮らしていたという。畑中は、花子について、動作や話し方がはきはきしており、利口そうで渡欧する船の中でも皆から一目おかれていたと回想し、日本人村での花子の舞台の様子については以下のように語っている。

踊りが上手でね、博覧会でもたいした人気さ。あの<sup>さらめ</sup>「晒し女」、つて言つたつけかな、高い足駄をはいて、長い布をパツパツとすごきながら踊るのがあるだろう。あれをやつて、広い舞台を縦横にとびまわる時なんか、拍手喝采だつた。あの小さい身体に、どこに、そんな力があるのかと思う位、自由自在なんだからねえ<sup>(16)</sup>

小山内のいう「我々」には含まれないであろう畑中は、海の向こうの観客が花子の舞台をどのように見ていたのかを、色眼鏡をかけず伝えてくれている。こうした観客の好意的な反応が、花子に異国で自らの芸によって立つ決意を固めさせてくれたのであろう。自身がなぜアントワープに残り、日本料理店を開くことにしたのか語ってはいない畑中だが、この店の存在は花子にとって心強いものであったに違いない。

のち座長となって一座に責任を持つようになった花子は、畑中だけでなく、各国の日本料理店を人脈作りの拠点としたようである。やがて第一次世界大戦が勃発した時には、花子はロンドンに逃れ、しばらく〈生稲<sup>いくいね</sup>〉という日本料理店兼旅館の世話になっている。戦時中で座員の確保に苦勞していた花子を、この〈生稲〉の料理人や給仕が舞台に立つことで助けたこともあったようである<sup>(17)</sup>。

その長い海外生活において、「我々」に含まれない日本人たちは、概して花子に協力的であったといえる。また、日本人がほとんどいないようなところで生き抜いている者にとっては、花子一座の来訪は願ってやまないものであった。そういった同胞との公演先での触れ合いについて、花子は以下のよう語り残している。

羅馬でもう一つ其の時（1913年——引用者注）の旅を憶起すことは劇場の楽屋へ一人の日本人が訪問して来たことでした。其の人の名は忘れてしまひましたが、二十年前に日本へ往つた伊太利軍艦に傭はれ其のまゝ伊太利に来て了ひ、今では伊国婦人を女房に持ち、大工をして生活して居ると云ふことでした。日本語を永い間使はぬので、こみ入つた事は忘れて談話<sup>はなし</sup>得ませなんだが、其れでも此方が云ふことは能く解りました、座員の一人は招待されたまゝ、に日曜日の午後其の住家を訪問したそうですが、羅馬の郊外で、二階立の家を借りて夫婦限りで呑気に生活して居たそうです。女房さんもよかよか親切に座員を待遇し、羅馬に居る間座員は幾度も其の家を訪問しました<sup>(18)</sup>。



彼は同胞との邂逅がただただうれしかったのであろう。花子は他にもマルタ島で日本人としてただ一人、雑貨店を開いていた中川という人物との交流についても言及している<sup>(19)</sup>。花子一座が異国の観客のみならず、そうした異郷に生きる同胞たちにも「日本」を伝え励ましたことを忘れてはならないだろう。

#### 4

しかしながら、知識層の日本人男性たちは、異郷においても「我々」同士で結束していたようである。各国の大都市においては、知識層の日本人たちによるサークルのようなものが存在していたが、それは花子を同胞として温かく迎え入れてくれるような場ではなかったのである。一座の興行をプロデュースしていたロイ・フラーの指示により、舞台上腹を切る演技を見せるようになった時のことを、花子は以下のように回想している。

私の女の腹切りの血潮がサツト<sup>ほとばし</sup>迸出つて、土間の前側の列の燕尾服の見物人の胸にかゝつたのを新聞が書立てるなどして、大入大繁盛でしたが、私は巴里には日本の美術家の留学生の方も大勢被入るし、こんな芸を見せてはと、初めは可なりフウラアさんと争つたのですが、此の大入を見て仕方がないと諦めて毎晩続け打ちました<sup>(20)</sup>。

自身に対する批判的な意見も、母国でのものなら当時は聞かない、読まないということに対処できたことだろう。しかし、現地における知識層日本人サークルからの非難のまなざしや言葉は避けようがなく、巡業する先々で花子を悩ませたことと思われる。パリだけでなく、その頃の日本の知識人がこぞって目指したベルリンでも、様々なサークルが結成されており、1910年から1913年までベルリンに留学していた作曲家の山田耕筈も文学系のサークルに参加していたらしい。山田の『自伝 若き日の狂詩曲』は、当時の異国におけるこうしたサークルの性質や雰囲気伝えており興味深い。同時期に留学していた山岸光宣、巖谷小波の後任としてベルリン東洋語学校の講師

をしていた辻高衡<sup>たかひら</sup>なども山田と同じサークルに所属していたようである<sup>(21)</sup>。誰でも参加できるというものではなかったこうしたサークルが、花子を仲間に入れることはなかったが、誰をも排除しない輪に花子を招じ入れ、助力してくれる知識人もベルリンには存在していたのである。それは『Ost=Asien (東亜)』<sup>(22)</sup> という月刊誌をドイツ語で発行していた老川茂信であった。

『Ost=Asien』は、その面倒見のよさから「ベルリンの私設公使」との異名をとった、ジャーナリストの玉井喜作が創刊したものだが<sup>(23)</sup>、老川はベルリン大学で学ぶ傍ら玉井を助け、1906年に玉井が結核で世を去ったのちは、その編集と主筆を引き継いだのである。『Ost=Asien』1908年3月号において、老川はベルリンの Passage Theater でおこなわれている花子の公演について、ほぼ2ページを割いて丁寧に紹介している<sup>(24)</sup>。上演作品『Otake (おたけ)』と『In einem Teehaue (茶店にて)』のあらすじまで載せるという念の入れようである。その記事で老川は、海外の観客の好みに合わせて演ぜざるを得ない一座の立場を擁護している。腹切りに関しても、日本では女性はそのような自害の仕方はしないが、要望にこたえてその場面を入れているのだと説明しているのである<sup>(25)</sup>。

続く1908年4月号では、エドゥアルト・ロマノフスキーによる花子にささげる詩<sup>(26)</sup>と、ヨーロッパ・アジア協会のサークルに招かれた際の花子の写真(図1)が掲載されている。大勢のドイツ人と一緒に写っているこの写真は、先に紹介した志賀直哉の「十数人の独逸人の崇拜者を後ろに並べて写した写真などもあつた」という説明を想起させる。『Ost=Asien』は日本でも入手可能だったので、志賀が見たのはこの写真だったのではないか。いずれにしろ、この写真からは賓客として遇されている花子の様子がうかがえる。

老川はベルリンでの花子の日本女優としての活動を支援しただけでなく、私生活の面でも助けている。1909年、ヨーロッパ巡業中の一団がミュンヘンへ入った時、花子の夫で一団の通訳兼交渉係であった吉川馨の結核が悪化し、巡業についていくことができなくなってしまった。ロシア巡業の契約があった花子はエージェントに相談し、吉川をベルリンの病院に入院させドイツ国内巡業を優先させることとした。

Hanako im Kreise einer europäisch-asiatischen Gesellschaft.



図1 ヨーロッパ・アジア協会のサークルにおける花子

2列目向かって右から3人目の花束を持っている女性が花子。その隣が夫の吉川。  
最前列向かって右から2人目の男性が老川と思われる。

(*Ost=Asien*, No. 118, April 1908, p.414.)

巡業先からベルリンに戻っては、吉川の看病をする日々に何とか耐えられたのは、老川という頼れる人物がそこにいたからであった。ついにロシア巡業をそれ以上延期できなくなった花子は、老川に看病を頼み、1909年の末に初めてのロシア巡業にのぞんだのだが、翌年の2月14日、巡業を終え、ベルリンの病院に駆け付けた花子は、夫と無言の対面をすることとなった。吉川はその日の朝、息を引き取っていたのである。晩にはハノーファーの舞台に立つことになっていた花子は、後のことは老川に頼んで、列車で劇場へと向かった。花子は「独逸で日本の雑誌を発行してお出になる老川さんにどんなに御世話になりましたらう。言葉にも口にも云尽されない程です」<sup>(27)</sup>と回想しているが、それはまさに誰にでもできるようなことではなかった。1910年2月号の『*Ost=Asien*』で、老川は吉川の写真入りの追悼記事を掲載し、その死を悼んでいる<sup>(28)</sup>。これも、老川の信念の表れと見ることで

きよう。

斎藤茂吉の義父の斎藤紀一など、洋行後の人生が約束されたエリートで老川と親交を結び『Ost=Asien』に寄稿している者は数多い。だが、老川は、肩書に左右されることなく、自分を頼ってくる人々にはすべて親身に接したようである。「ベルリンの私設公使」の異名は、老川にも似つかわしいように思われる。

1900年のパリ万博に参加した後、東欧を巡って公演をしていた烏森芸者や、1901年11月から翌年にかけてドイツ公演をおこなった川上音二郎・貞奴一座を支援した玉井喜作の精神を受け継ぎ、何者をも排除しない和を大事にしていた人物であったのだろう。

## 5

花子と老川の交流は、恐らく、老川の評判を聞いた花子の方から彼を訪ねて始まったものと思われるが、自ら花子との接触を求めてくる日本人も存在した。壮士芝居に出ていたことがあり、三浦環のマネージャーをしていた経験もある千葉<sup>しゅうほ</sup>秀圃という非常に興味深い人物である。千葉は語学に秀でており、ドイツ語で日本に関する講演をしながらヨーロッパをわたり歩いていた。武者小路公共は、中等学校の時、千葉にドイツ語を習っており、ルーマニア公使時代に偶然、マリー皇后から以下のような話を聞いて、すぐにそれが千葉のことだと分かったと語っている。

第一大戦前ウィーンから、講演旅行に來た日本の先生がありました。紋付の和服姿も上品で、話す言葉は洗練された独逸語、四十七士の話を巧みに聴かせて呉れました。私は貞奴の劇を巴里で見て居る丈に、筋も一通りは承知して居るので、殊更興味が深かつたのです。王様も又母上カルメン、シルヴァ陛下も迎もお喜びで、殊にお両方とも独逸語を母国語とされるだけに、非常に御気に召した様でした<sup>(29)</sup>

本人が心から望めば、母国での栄達もあり得たような、ずば抜けた才能の

持ち主であったようである。1913年、花子一座がウィーンで興行していた折、花子が滞在していたホテルを千葉が訪問したのが、彼らの交流のきっかけであり、パリで自分の主演映画が撮られることになった折、脚本を書いてくれるよう花子は千葉に依頼した。しかし、第一次世界大戦の勃発により、撮影は打ち切られることになり<sup>(30)</sup> 花子はロンドンに避難したが、千葉は同行せず、ジュネーブで病没してしまった。

この千葉と親交があったのが、巖谷小波門下の作家で、黒田湖山、西村渚<sup>しよ</sup>山<sup>ざん</sup>などとともに門下の三秀才とも称された生田葵山<sup>きざん</sup>（生田葵）であった<sup>(31)</sup>。ベルリン留学中であった生田は、千葉が同地に滞在した折に日本料理店〈松下〉で会い、舞台の台本を書くことを依頼されたことなどもあったようである。生田は1914年の秋にベルリンからロンドンに避難した折、ロンドンの日本料理店〈生稲〉で、花子から千葉の最後の様子を知ることになった。千葉が英国行きを聞き入れずジュネーブで病気のため動けなくなったこと、食べ物がいと花子が滞りする〈生稲〉宛てに手紙があったので、缶詰を送ってやったが、それが届かぬ前に没した旨、病院から知らせがあったことなどを、花子は眼を潤ませて生田に語ったという<sup>(32)</sup>。

生田は、ベルリンでその舞台を見たことがきっかけで、花子と交流を持つようになったようである。以前から劇作に興味を持っていた生田は、アンバサダーズ劇場に出演することになった花子に『Kimusume（キムスメ）』という作品を提供した。お菊という娘が大切な皿を無くしたという濡れ衣を着せられ、身の潔白を示すために自害するという話で、40代半ばであった花子はこの薄幸の娘・お菊を演じて満場の観客を泣かせた。Independent Theatreの設立者であるヤコブ・トーマス・グラインは「『Otake（おたけ）』<sup>(33)</sup> は単に滑稽な寸劇に過ぎないが『Kimusume』は本物のドラマだ」<sup>(34)</sup> 「小さくきゃしゃで、奇妙にも見えるが、マダム花子は第一級の俳優である。（…）悲劇『Kimusume』における、揺るぎなく誠実な演技は見事としか言いようがない」<sup>(35)</sup> と、生田の作品と演技者としての花子をとともに評価している。花子と同じくロンドンに避難していたロダン夫妻も『Kimusume』を見て、お菊の死の表情に非常に満足したと花子を褒めてくれたという<sup>(36)</sup>。花

子は女優業を引退するまで、このお菊役を繰り返し演じるようになった。

生田はさらに『Oya Oya! (おやおや!)』という芸者を主人公とした喜劇を花子に提供し、花子は悲劇と喜劇どちらも巧みに演じる女優としてさらなる人気を博し、当時の著名演劇人の人名録『フーズ・フォー・イン・ザ・シアター』に名を残すこととなったのである<sup>(37)</sup>。語学力の優れた千葉や文壇に注目された経歴のある生田の協力なくては、花子の女優人生終盤の栄誉は得られなかったかもしれない。

つまり、海外におけるマダム花子の活躍は、知識層も含めた少なからずの同胞によって支えられていたのであった。彼らが花子を応援する側にまわったのは、自らの芸ひとつを武器に海外のショービジネスの世界でわたり合っている花子に、シンパシーを覚えたからではないか。それは、同情というより強い連帯感で、つかの間の「滞在」ではなく、異郷に「生き、生活していく」ことの難しさを知っている者同士の和・輪が、そこに生まれたのである。花子は最終的な日本帰国を果たす前に、ロンドンで〈湖月<sup>こげつ</sup>〉という日本料理店を開いたのだが、これは自らもその輪を広げたいと願ってのことであり、故国から遠く離れた地で自身を助けてくれた同胞たちへの、彼女なりの恩返しであったのではないか。〈湖月〉はロンドンを訪れる者で足を運ばぬものはないといわれるほど繁盛し、異郷にある日本人同士を確実につなげたようである。

## 注

- (1) 澤田助太郎「ヨーロッパと日本における『花子』評価の落差に関する比較文化論的考察」、『AURORA』No.3、岐阜女子大学英語英米文学会、1999年、小林実「邂逅のすれちがい——小山内薫のスタニスラフスキー邸訪問——」、『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第39集、2008年、武田清「大正・昭和初期新劇とロシア演劇の異文化接触について」、『明治大学人文科学研究所紀要』第73冊、2013年など。
- (2) 小山内薫「露西亞の年越し」、『小山内薫全集』第6巻、臨川書店、1975年（初出は『三田文学』第5巻第5号、1914年）。
- (3) 小山内薫「露西亞の年越し」、525-526頁。
- (4) 小林実「邂逅のすれちがい——小山内薫のスタニスラフスキー邸訪問——」、『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第39集、2008年。
- (5) 武田清「大正・昭和初期新劇とロシア演劇の異文化接触について」、『明治大学人文

科学研究所紀要』第73冊、2013年、143頁。

- (6) 森林太郎「屹度有望だ」(伊原青々園筆記)、『歌舞伎』第110号、1909年、75頁。
- (7) 森林太郎「花子」、『鷗外選集』第2巻、岩波書店、1979年、271頁。
- (8) 志賀直哉「新作短篇小説批評」、『白樺』第1巻第5号、1910年、19頁。
- (9) 平川祐弘「森鷗外の『花子』——見返りの心理——」、『和魂洋才の系譜』(新装版)、河出書房新社、1987年、279-311頁。
- (10) 「伯林電報 日本の名優」、『東京朝日新聞』、1910年2月23日。
- (11) 坂内徳明・亀山郁夫「ロシアの花子」、『共同研究 日本とロシア』、早稲田大学文学部 安井亮平研究室、1987年、127頁。出典はN.Evreinov, Lyubovnaya reklama, "Teatr i iskusstvo", SPb.1909, No.49. pp.110-111. 和訳は坂内・亀山両氏による。
- (12) 太田花子「芸者で洋行し女優で帰る迄の廿年」、『新日本』第7巻第1号、1917年。
- (13) 太田花子「貴族と女優との握手」、『新日本』第7巻第6号、1917年。
- (14) 「明治三十五年五月 丁抹国人ゼエー、ウイルガアードなる者本邦技芸者雇入れ同国へ渡航に関する件」(別紙の名簿)、『海外渡航関係雑件』第4巻。外務省外交史料館所蔵。
- (15) 太田花子「芸者で洋行し女優で帰る迄の廿年」、『新日本』第7巻第1号、1917年、92-93頁。
- (16) 羽生操「ロダンのモデル——花子の写真——」、『文芸』第11巻第2号、1954年、124頁。
- (17) 高村真夫「マダム花子の播州皿屋敷」、『欧州美術巡礼記』、博文館、1917年、75-76頁。
- (18) 太田花子「貴族と女優との握手」、36頁。
- (19) 同、37頁。
- (20) 太田花子「芸者で洋行し女優で帰る迄の廿年」、98頁。
- (21) 山田耕筈『自伝 若き日の狂詩曲』、中央公論新社(中公文庫)、2016年、177頁(初版は『若き日の狂詩曲』、講談社、1951年)。
- (22) 『Ost=Asien』に関しては泉健氏が研究されており、氏の「『Ost=Asien』研究——その1. 全目次——」、『和歌山大学教育学部紀要——人文科学——』第52集、2002年および「『Ost=Asien』研究——その4. 全目次：独語版——」、『和歌山大学教育学部紀要——人文科学——』第54集、2004年は原本に当たる際の手引きとなった。
- (23) 大島幹雄『シベリア漂流 玉井喜作の生涯』、新潮社、1998年、9頁。
- (24) "Zum Gastspiel von Madame Hanako in Berlin", *Ost=Asien*, No.117, März 1908, pp.385-386.
- (25) 同、p.385.
- (26) Eduard Romanowski, "An die japanische Tragödin Mme Hanako.", *Ost=Asien*, No.118, April 1908, p.413.
- (27) 太田花子「芸者で洋行し女優で帰る迄の廿年」、100頁。
- (28) *Ost=Asien*, No.139, Februar 1910, p.287.

(26) マダム花子と同胞たち

- (29) 武者小路公共「C先生」、『滞欧八千一夜』、暁書房、1949年、208-209頁。
- (30) 花子は「やつと一フィルム写したかと思ふと今度の大戦争が初まつたのです」と述べており（「芸者で洋行し女優で帰る迄の廿年」、102頁）1本の映画は完成していたと思われる。この花子主演の映画に関しては稿を改める。
- (31) 伊狩章「後期硯友社の作家たち」、『硯友社文学集』（明治文学全集22）、1969年、369頁。
- (32) 生田葵「三浦環女史の愛人」、『婦人公論』第15巻第1号、1930年、50頁。
- (33) 花子一座が『Kimusume』と同時に上演したロイ・フラーによる作品。
- (34) *The Sunday Times*, 8<sup>th</sup> November 1914.
- (35) “Madame Hanako at the Ambassadors Theatre”, 誌名や年月日は不明。花子所持の劇評と思われる。岐阜県図書館所蔵。
- (36) 高橋象「ロダン・ハナコ」、『ひだびと』第64号、1939年、483頁。
- (37) *Who's Who in the Theatre*, compiled and edited by John Parker, Sir Isaac Pitman & Sons, Ltd. 1916, p.281.

\*本文中の引用箇所については、漢字旧字体は原則として新字体に改めた。

本稿は、2017～2022年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「演劇におけるジャポニズム——海外巡業劇団の伝えた『日本』——」（課題番号17K02349）による成果の一部です。